

ジェイムズ・ジョイスの「二人の伊達男」

南 谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Reading of “Two Gallants” by James Joyce

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Abstract

“Two Gallants,” the sixth story in James Joyce’s *Dubliners*, is one Joyce himself deemed to be very important. This essay is an attempt to explicate this story from Florence L. Walzl’s viewpoint of “betrayal, social, political, and religious.” Special focus is placed on the characters’ motives on different levels and the significance of the gold coin introduced at the end of the story.

「二人の伊達男」は、『ダブリンの人々』の6番目の作品で、「思春期」の4つの作品群の中では、「イヴリン」「レースの後で」に次ぐ3番目のものである。また、執筆順からすると13番目に当たる。

*

8月の灰色の暖かな夕暮れが街に降り、夏の名残りの生暖かな空気が通りに渦巻いた。日曜日の休息に鎧戸を下ろした通りには、華やかな色に包まれた群衆が奔めいていた。街灯は、その高い柱の上から、光る真珠のように、下に群がる生きた組織を照らしていた。その組織は形と色とを絶えず変えながら、暖かな灰色の夕暮れの空気に、変わることはない、絶えることのない眩きを立ち昇らせていた。(第1段落)⁽¹⁾

二人の若い男がラトランド・スクエアの丘から下ってきた。その一人は今長い独白を

終えようとしているところだった。もう一人は、歩道の端を歩き、相方の粗暴な動きのために、時には道路にまではみ出して歩かなければならなかったが、話に興じているような表情をしていた。彼はずんぐりとした体型で赤ら顔をしていた。ヨット帽を後にのけ反らせてかぶり、話の進行に伴って、表情の波紋が、目元や口元や鼻の脇から、顔中に広がっていった。嘎れたような笑い声が次々と、痙攣的に震える体から小刻みに噴出した。彼の目は、小狡そうな喜びに輝き、相方の顔へひっきりなしにちらちらと向けられた。一度か二度、彼は闘牛士のように肩に吊るした軽いレインコートを掛け直した。半ズボン、白いゴム靴、そして陽気に肩に吊されたレインコートというその出立ちは、若さを表していた。しかしその腰の辺りは丸みを帯び、髪は薄く灰色がかってきていた。そして表情の波が顔から去った後には、ある荒廃感が漂っていた。

相方の独白が一段落したと十分に確認すると、彼はたっぷり30秒、音を立てずに笑って、それから言った。(第2段落)

——いやあ…そいつは何とも傑作だ！

彼の声は活力が抜けていて、彼はそれを繕うためにユーモアを込めてつけ足した。

——そいつは、めったにお目にかかれなような、極上の、こう言ってよけりゃあ、^{リシエルシエ}選り抜きの傑作だな。(第3段落)

これを言ってしまうと、彼は真顔になり黙り込んだ。午後の間中ドーセット・ストリートのパブでしゃべり続けていたため、彼の舌は疲れていた。ほとんどの男達はレネハンをたかり屋だと考えていたが、こうした評判にもかかわらず、彼の捷っこさと舌の回転は、彼に対する全面的な防壁が築かれることを防いでいた。バーに入ると彼は友人達の所へ勇敢に歩み寄り、その端っこに機敏に喰らいつき、気がつくといつの間にか回し飲み^{の輪}の中に入っているのだった。彼は色々な物語、俗謡、謎々で武装した遊び人だった。どんなに無礼なことを言われても彼は傷つかなかった。彼がどうやって生計という厳粛な事実を立てているのか誰も知らなかったが、彼の名はほんやりと競馬新聞と連想されていた。(第4段落)

——で、コーリー、どこでその女をたらし込んだんだい、と彼は聞いた。

コーリーは、舌で素早く上唇を舐めた。

——ある晩、デйм・ストリートを流していた時のことだ。ちょいと見るとウォーターハウスの時計の下にぐっとくるのがいるじゃないか。それでとりあえず声を掛けたって訳さ。そして運河のほとりを連れて歩いて——何でもバゴット・ストリートで女中をやっているという話でな——俺は肩に手を回して、その晩はちょっと抱きしめてやったさ。それから次の日曜日、今度は待ち合わせをして、ドニープルックに出掛け、野原に連れてったんだ。前には牛乳配達^{の男}とつきあってたとか言ってたな…素晴らしくよかったぜ。毎晩

煙草を持ってきてくれたし、電車賃は行きも帰りも払ってくれた。ある晩には2本のたまらねえような葉巻を持ってきてくれたね——奴さんが吸ってた極上物よ。…ところで俺はあいつが腹でも膨らませるんじゃないかと心配だったが、その辺はあいつはよく心得たものだったね。

——あんたが結婚してくれるものと思ってるんじゃないのかい、とレネハンは言った。

——俺は失業中だと言ってある、とコーリーは言った。前にはピムの店にいたと言ってな。それに俺の名前はまだ教えてないんだ。そんなへまをするほどぶじゃないぜ。それでもあいつは俺のことをちょっとした家柄の男だと思っているんだ。

レネハンは再び音を立てずに笑った。

——今まで聞いた中じゃ、そいつが断然、最高傑作だな。(第5段落)

コーリーの歩みぶりがその追従を受け入れたことを表した。彼の大きな図体が左右に揺れると、友人は歩道から2、3歩軽くステップを踏んで道路に降り、それからまた歩道にひょいと戻った。コーリーは警部の息子で、親父の体格と歩きかたを受け継いでいた。彼は両手を体側につけ、体を垂直に保ったまま、頭を左右にゆさぶりながら歩いた。彼の頭は大きな球のようで、脂ぎって、どんな天候でも汗をかいた。そして彼の帽子は、その球形の頭に斜に置かれ、まるで球根から生えてきたもう一つの球根のように見えた。彼は行進でもしているかのようにいつも正面を見ていた。そして通りすがりに誰かを見たいと思うと、腰のところから回転させなければならなかった。当面、彼は定職を持たないで街をぶらぶらする生活を送っていた。何かの仕事の空きが出るたびに、彼に厳しく言う友人がいた。友人達は、彼が私服刑事と一緒にいるところをしばしば見ている。彼は全ての事件の内幕に通じ、最終的な判断を下すのが好きだった。相手の話は聞かないで話した。話題は主に自分のことだった——自分は誰それにこう言った、誰それは自分にこう言った、そして自分はこう言って話に決着をつけた。こうした話をする時、彼は自分の名前をフローレンス風にコホーリーと発音した。(第6段落)

レネハンはコーリーに煙草を差し出した。この二人の青年が、群衆の中を歩いて行く時、コーリーは時折、通りすがりの女に体を回転させながら微笑みかけたが、レネハンの視線は、二重の光暈に包まれた大きな青白い月に向けられていた。彼は、月の面を灰色の雲がよぎるのを熱心に見つめていた。ついに彼は口を開いた。

——で、コーリー…あのことはうまくいくんだろうな？

コーリーは応える代わりに片目を表情豊につぶってみせた。

——そいつはいいかもになるのかい？とレネハンは疑わしげに聞いた。女は分からんもんだからな。

——大丈夫だ、とコーリーは言った。やり方は心得ているさ。あいつは俺に少しのぼせ

気味だからな。

——陽気な女泣かせだね、お前さんは、とレネハンは言った。しかも正統派の女泣かせだよ。(第7段落)

この科白には一抹の揶揄の調子も含まれていて、卑屈さに墮すことから免れていた。自分自身を守るために、レネハンは、自分の追従の言葉がからかいの言葉として解釈できる余地を残しておくという習慣を身に付けていた。しかし、コーリーの精神はそうした機微には疎かった。

——女中風情を落とすくらい屁でもないさ、コーリーはきっぱりと言った。俺を信用しときな。

——百戦錬磨のコーリー様の言葉なものな、とレネハンは言った。

——最初俺は、South Circular の辺の嬢さんたちとつきあってたもんさ、とコーリーは打ち明けるように言った。電車に乗せて、どこかに連れ出し、電車賃を払って…音楽や芝居に連れていったり、チョコレートやら甘いものやら、いろいろ買ってやったり——あいつらには、そりゃたっぷり貢いだものさ、とコーリーは、聞き手が信じていないのを意識するかのよう説得的な口調で言った。しかしレネハン、話し手の言葉を十分に信ずることが出来た。彼は重々しく頷いた。

——その辺は俺にも覚えがあるね、とレネハンは言った。骨折り損の何とかさ。

——そこまで貢いで、その見返りに何があったというんだ、コーリーは言った。

——こちとらもご同様に、とレネハン。

——ただ、一人だけは別だったな。(第8段落)

コーリーは舌を上唇に這わせて湿らせた。思い出が彼の目を輝かせた。彼もまた月の、今はほとんどヴェールに覆われた青白い面を見つめ、物思いに耽っているようだった。

——あの娘はちょっとよかったな、とコーリーは悔やむような調子で言った。彼は再び黙り、それからつけ足すように言った。

——その娘は今では辻君様さ。ある晩アール・ストリートを流していたら、二人の男と一緒に車に乗って浮かれてた。

——あんたのせいだね、そいつは、とレネハンは言った。

——俺の前にも男はいたさ、とコーリーは平然と言った。これはレネハンに信じる気になれなかった。彼は頭を左右に振って、それから微笑んだ。

——俺を騙そうたってそうは問屋がおろさないよ、と彼は言った。

——神に誓って本当さ、とコーリーは言った。あの娘自身の口から聞いたんだ。レネハンは悲劇的な身振りをして見せながら言った。

——いやはや、ひどい裏切り者だね、お前さんは！(第9段落)

彼らがトリニティ・カレッジの柵を通り過ぎるとき、レネハンは道路にひょいと飛び降りて時計台を見上げた。

——20分過ぎだぜ。

——あわてることはない、とコーリーは言った。あいつはちゃんと来てるさ。俺はいつも少し待たせてやるんだ。レネハンは音を立てずに笑った。

——いやはや、コーリー、お前さんは女の扱いを心得てるね。

——女の手管は全部心得てるさ、とコーリーは告白するように言った。

——だけどコーリー、お前さん今晚本当に大丈夫だろうな。こりゃ結構厄介な仕事だぜ。やつらはこうした点にかけちゃ、ひどく締め屋だからな…え、どうなんだい？

彼の輝く小さな目は、相方の顔の中に確証を求めて注がれた。コーリーは、まるでしつこい虫でも追い払うように頭を左右に大きく振った。彼の眉根は寄せられていた。

——俺はちゃんとやる。任せておけないって言う気か？

レネハンはそれ以上言わなかった。彼は相方の機嫌を損ねたくなかった。くたばってしまったのだ、どこへでも消えちまえたのと言われたくなかった。ちょっとした手際が必要だった。しかしコーリーの眉根はじきに穏やかになった。彼の考えは違った方面に向けられていた。

——あいつは、悪ずれしてないいいあまだ、とコーリーは、賞翫するように言った。あいつはそういう女だ。(第10段落)

彼らはナッソー・ストリートに沿って歩き、それから方向転換をして、キルディア・ストリートに入った。キルディア・ストリート・クラブの入口からほど遠くないところに、豎琴の大道楽師が、小さな輪をなしている聴き手たちに豎琴を弾いていた。彼は弦を無造作に弾き、時折、新しい聞き手が来ると、ちらりとその顔に素早い視線をやり、また時折、物憂げに空を見上げたりしていた。彼の豎琴も、覆いが膝のところのだらしなく垂れていても気に留めないかのようで、見知らぬ観客の目にも、自分を弾く親方の手にももううんざりといった風情だった。楽師の一方の手は低音部で「静まれ、おゝモイルの海よ」の旋律を奏で、もう一方の手は、高音部の一連の音符を求めて疾走していた。音は深く、豊かに響いた。(第11段落)

二人の青年は、黙ったまま通りを歩いていった。豎琴の奏でていた物悲しい音楽が彼らを追い掛けてきた。スティーヴン・グリーンまで来ると、道を横切った。すると、電車の騒音や照明や群衆が、二人を沈黙から解放した。(第12段落)

——あそこにいるぞ！ コーリーが言った。ヒューム・ストリートの角に、若い女が立っていた。彼女は青い服を着、白いセーラー帽を被り、歩道の縁石の上に立って、一方の手に持ったパラソルをくるくる回していた。レネハンは生気を帯びてきた。

——ご拝顔といこうぜ、コーリー。コーリーは友人を横目で見た。不快そうな笑みが彼の顔に浮かんだ。

——割り込もうって気なのか、と彼は言った。

——滅相もない！とレネハンは正面切って言った。何も紹介してくれなんて言ってるんじゃないさ。俺がしたいのは、奴さんの顔をちょっと拝みたいっていうだけのことだよ。別にとって食おうって訳じゃないさ。

——顔を拝む？とコーリーは、さっきより愛想よく言った。そうだな、じゃこうしよう、俺があっちへ行ってあいつと少し話してるから、お前はそこを通り過ぎていきな。

——合点！とレネハンは言った。コーリーは、すでに一方の脚を上げ歩道の縁の鎖を跨ごうとしていた。レネハン呼び掛けた。

——で、その後は？ どこで落ち合おうか？

——10時半、とコーリーはもう一方の脚を鎖の上に持ち上げながら言った。

——場所は？

——メリオン通りの角。そこへ戻ってくる。

——うまくやれよ、とレネハンは別れの挨拶として言った。(第13段落)

コーリーは応えなかった。彼は頭を左右に振りながら通りを渡っていった。彼の大きな体、ゆったりとした足取り、深靴が重く道を踏み締める音は、どこか勝利者の様相を帯びていた。彼は若い女に近寄り、挨拶もせずすぐに会話を始めた。彼女はパラソルを先程より速く回し、踵を軸にして、体を左右に半回転させた。一度か二度、コーリーが彼女に顔を近づけて話しかけると、彼女は笑って顔を伏せた。(第14段落)

レネハンは数分間彼らを見つめていた。それから鎖に沿って速足にしばらく歩き、道路を斜に横切っていった。ヒューム・ストリートの角に近づくと、空気が濃い香水の匂いに染まっていた。彼の目は若い女の容姿を素早く漁るように探った。彼女はよそ行きの服に身を包んでいた。青いサージのスカートが、腰のところで黒い革のベルトで締められ、ベルトの大きな銀のバックルが、白いブラウスの柔らかな生地を銜え込み、彼女の体の中央を押さえていた。その上に、真珠貝のボタンと蠢だった黒いボアのついた短い黒のジャケットを着ていた。チュールの小襟の端は周到に乱され、胸元には束ねられた赤い花が、茎を上にして留めてあった。レネハンの目は、彼女の筋肉質の引き締まった小柄な体を品定めするように捉えた。あからさまな剥き出しの健康が、彼女の顔に、ふっくらした頬に、そして物怖じしない目に輝いていた。彼女の目鼻立ちは大造りだった。小鼻は広がり、緩い口元は自足した笑みに開き、前歯が二本突き出していた。通り過ぎながらレネハン帽子を脱いだ。それから約10秒後、コーリーは手をぼんやりと上に持ち上げ、物思わしげに帽子の位置を変えた。それが彼が空中に送り返した合図だった。(第15段落)

レネハンはセルボーン・ホテルまで歩き、そこで立ち停った。しばらく待っていると、コーリー達が歩いてくるのが見えた。そして二人が角を右に曲がるとレネハンは、白い靴を軽やかに運びながら、メリオン・ストリートの片側を通って彼らの後についていった。前の二人の歩調に合わせてゆっくりと歩きながら、彼はコーリーが若い女の方に頭をひっきりなしに向けるのを見た。コーリーの頭はまるで軸回転をしている大きなボールのようだった。レネハンは、二人がドニーブルック行きの電車の昇降ステップを昇っていくまで、彼らを視界の中に捉えていた。それから彼は振り向いて、今来た道を戻り始めた。(第16段落)

一人になると彼の顔は年老いて見えた。彼のこれまでの陽気さは消え失せ、デュークス・ローンまで来ると、彼は、手をその鉄柵に這わせた。豎琴奏者が奏でていた曲が彼の動きを支配した。彼の柔らかい当て物を敷いてある靴は旋律を奏で、彼の指は鉄柵の上に、一連の和音の変奏を物憂げに掻き鳴らした。(第17段落)

彼はスティーヴン・グリーンを無気力にぶらつき、次いでグラフトン・ストリートを下っていった。彼の目は、通り過ぎる群衆の様々な要素に注意を払ってはいたが、むっつりとした視線だった。彼には彼を魅惑するように意図されているもの全てがどうでもいいもののように思われ、彼に大胆になれと誘っているような視線に対しても応えなかった。機知を利かせたり相手を楽しませたりするために随分としゃべらなければならないことが分かっていた。そうした煩瑣な行為のためには彼の脳と喉はあまりに干からびていた。コーリーと再び落ち合うまでどうして時間を潰すかが彼を少し悩ませた。当てもなく歩き回るよりほか考えつかなかった。彼はラトランド・スクエアの角まで来ると左に折れた。暗い静かな路地に入るとさっきより落ち着くことができた。陰鬱な光景が彼の今の気分 zu 適合した。そこをしばらくうろついた果てに、ある一軒の店の前で立ち停った。見すばらしい店で、上には Refreshment Bar という白い文字が印刷された看板が掛かり、窓には Ginger Beer と Ginger Ale という文字が描き流されていた。大きな青い皿の上にはハムの切り身がさらされ、その近くの皿にはふんわりとしたプラム・プディングの一片が置かれていた。彼はこの食物をしばらくじっと見つめていたが、通りの左右に物憂げに目を走らせると素早く店の中に入った。(第18段落)

彼は空腹だった。二人のしみつたれのバーテンダーに頼んで持ってきてもらった少しばかりのビスケットの他には、朝食時から何も食べていなかった。彼は、二人の女工と機械工のいる向かいの、テーブルクロスを掛けてないテーブルに腰を掛けた。だらしない給仕女が彼のテーブルにやって来た。

——^{まめ}豌豆は一皿いくらだ？

——1ペンス半ですわ、と女は言った。

——そいつを一皿くれ、と彼は言った。それにジンジャービールを一本。(第19段落)

彼は、自分の上品ぶった風采を取り繕うために故意に荒っぽい言葉を使った。というのも、彼が店に入ってくると、あたりで交わされていた話が急に停んでしまったからである。彼は顔が熱くなるのを感じた。自然に見せるために、彼は帽子の庇を押し上げて後にずらし、テーブルの上に両肘を埋め込むようについた。機械工と二人の女工はレネハンの全身をじろじろ眺め回し、それから抑えた声で話を再開した。給仕女が彼のテーブルに、胡椒と酢で味付けした暖かい豌豆料理とフォークとジンジャービールを持ってきた。彼はそれを貪るように食べた。料理はとても旨く、彼は心の中にこの店を書き留めようとした。豌豆を全部食べ終わると、ジンジャービールをちびちび啜り、しばらくの間コーリーの冒険のことを考えた。彼の想像の中で、二人の恋人達はどこかの暗い道を歩いていた。彼の耳にコーリーの深くて力強い口説きの言葉が聞え、目には若い女のしまりのない笑いが映った。そのヴィジョンが、彼の現在の財布と精神の貧しさを鋭く感じさせた。彼はぶらぶらするあてのない生活、綱渡りの生活、やり繰り算段と策略を巡らす生活にもう飽きていた。彼も今度の11月で31歳になる。もう永遠にいい仕事には就けないのだろうか？ 終生自分の家庭は持てないのだろうか？彼は暖かな暖炉で燃える火のそばに座る心地よさ、素晴らしい夕食の席につく心地よさを想った。友人達や女達と通りをぶらつく生活はもううんざりするほど味わった。それらの友人達がどれだけの価値を持つものか、女達が結局はどんなものなのかももう分かっていた。経験が彼の心を、世間に対して苦々しくさせていた。しかし全ての希望を失ってしまったわけではなかった。彼は食べた後では、食べる前よりも気分が良くなった。人生に対する倦怠感も和らぎ、精神の敗北感も薄らいだ。彼もひょっとするとうまくこの世の片隅に、居心地のいい場所を見つけて落ち着き、幸せな生活を送ることができるかもしれない。もし誰か、気のいい素朴な心と、それに少しばかりの金を持った娘に出会うことができさえすれば…(第20段落)

彼は2ペンス半をだらしない給仕女に払うと、店を出て、再び通りをぶらつき始めた。彼はケイペル・ストリートに入り、市役所に向かって歩き、それからデイル・ストリートに入った。ジョージ・ストリートの角で彼の2人の友人に会い、立ち話を始めた。レネハンは通りをうろつき回ることから暫く休めるのが嬉しかった。友人達は今日コーリーに会ったか、何か新しい話はないかと尋ねた。彼は今日一日コーリーと一緒にだったと言った。友人達はほとんど話さなかった。彼らは群衆の中の何人かの人物にぼんやり目を留めては、批評めいたことを言った。友人達の一方が今日ウエストモーランド・ストリートでマックに会ったと言い、それに対してレネハンは、マックとは昨日イーガンの店で一緒にだったと応えた。ウエストモーランド・ストリートでマックに会ったと言った友人は、マックがピリヤードの試合で勝ったというのは本当かと聞いた。レネハンは知らなかった。彼はイー

ガンの店でホロハンがみんなに酒を振る舞ったと言った。(第21段落)

彼は10時15分前に友人達と別れ、ジョージ・ストリートを進んでいった。シティ・マーケットのところでグラフトン・ストリートに折れていった。女達や若い男達の群衆はいつしか疎らになっていて、歩きながら多くのグループやカップルが別れの挨拶を交わしているのが聞こえた。彼は、サージョンズ・カレッジの時計塔まで歩いていった。時計はちょうど10時を告げていた。彼はスティーヴン・グリーンの方を急ぎ足で歩いていった。万が一コーリーが早く帰ってきてはいけなかったからだった。メリオン・ストリートの角に到着すると、彼は街灯の下に立って、これまで取っておいた煙草の一本を取り出し、それに火をつけた。彼は街灯の柱に寄り掛かりながら、コーリーと若い女がやって来ると思われるところに視線を据えた。(第22段落)

彼の心は再び活発に働き始めた。彼はコーリーが首尾よくやりおおせたかどうかを思い巡らした。コーリーはもう女に尋ねてみたのだろうか、それとも最後の瞬間まで持ち出すのを待っているのだろうか。彼は、自分自身の問題に対する思いに加えて、コーリーが感じるであろうあらゆる苦悶と興奮を感じた。しかしコーリーのゆっくりと回転する頭部を思い出すと、幾分落ち着いた。コーリーはきつとうまくやるに違いない。突然その時、ひょっとしたらコーリーは別の道を通って彼女を家まで送り、自分との約束をすっぽかすのではないかという考えが彼を襲った。彼の目は通りを探索したが彼らの影はどこにもなかった。しかし彼がサージョンズ・カレッジの時計を見てから間違いなく30分が経過している。コーリーはそんなことをするだろうか。彼は最後の煙草に火をつけて神経質そうに吸い始めた。広場の向こう側に電車が停まるたびに彼は目を凝らした。彼らは別のルートで家に帰ったに違いない。吸っていた煙草の紙が破れ、彼はそれを呪いの言葉を吐きながら道に投げ捨てた。(第23段落)

突然彼らが彼の方に向かってやってくるのが目に入った。レネハンは喜びで小躍りした。そして街灯の柱に寄り添うようにしながら、二人の歩き方の中に結果を読み取ろうとした。彼らは足早に歩いていた。若い女は足を小刻みに動かし、コーリーは大股に彼女の歩調に合わせて歩いていた。彼らは話しているようには見えなかった。結果の暗示が、鋭利な刃物のようにレネハンを刺した。コーリーが失敗するであろうことが彼には読めた。もう見込みはない。(第24段落)

彼らはバゴット・ストリートに曲がっていった。レネハンはずぐに反対側の歩道を伝って彼らの後をつけ始めた。やがて彼らは立ち寄り、彼も立ち停った。彼らは一寸話していたが、やがて若い女は地下勝手口に通ずる階段を下りていった。コーリーは道の端の、階段から少し離れたところに立ち続けていた。数分が過ぎた。それから正面のドアがゆっくりと用心深く開いた。一人の女性の姿が階段を駆け降り、咳払いをした。コーリーは振り

向いて彼女の方へ行った。彼の大きな体が彼女の体を数秒間隠した。それから彼女はコーリーの体の陰から再び姿を現わし、階段を駆け上がった。ドアがさっと閉まり、コーリーはスティーヴン・グリーンの方角に足早に歩き始めた。(第25段落)

レネハンは同じ方角に急いだ。軽い雨滴がぼつりぼつりと落ちてきた。彼はそれを一つの警告とみなし、見られていないことを確かめるように、若い女が消えていった家の方にちらりと目を走らせてから、勢い込んで道を横切っていった。不安と息堰ききって走ったために息が上がった。彼は呼びかけた。

——やあ、コーリー！

コーリーは誰が呼び掛けたのかを見るために頭を回転させ、それからそれまでと同じように歩き続けた。レネハンはレインコートを片手で両肩にはおりながら彼を追って走った。

——やあ、コーリー！ 彼は再び叫んだ。

彼はコーリーに追いついて並び、彼の顔を鋭く見つめた。彼の顔には何も読み取ることができなかった。

——で？と彼は言った。うまくいったのかい？(第26段落)

彼らはイーリー・プレイスの角に来ていた。コーリーは相変わらず何も答えないまま左に急旋回し、脇道を進んでいった。彼の容貌は厳粛な平静さを保っていた。レネハンは息を切らしながらコーリーに遅れないようについて歩いた。彼の顔にはこうしたあしらいに困惑の色が浮かんでいた。彼の声に威嚇の調子が貫いた。

——言えないのか？と彼は言った。あいつに言ってみたのか？(第27段落)

コーリーは最初の街灯のところで立ち寄り、厳しい表情で前を見据えた。それから彼は手を厳かに光の方へ差し伸べ、それから微笑みながらゆっくりと開き、彼の使徒の凝視に晒した。掌の中に、小さな金貨が一枚光っていた。(第28段落)

* *

「二人の伊達男」にも、『ダブリンの人々』の読者には既に馴染みの、「麻痺」の一つの現れである、同じ言葉、同じ動作の繰り返しや、同じ場所をくるくると回る円環運動のイメージが用いられている。前者としては、レネハンの“*That takes the biscuit.*”という科白や、コーリーの上唇を舐める仕草の繰り返し、後者としては、夏の名残りの生暖かい風が、淀んだように通りで渦を巻くことや、コーリーやレネハンが特に決まった宛もなく市街を巡回するように歩く行程など、その例である。また、冒頭部の“*The grey warm evening of August ... and a mild warm air ... [The crowd] changing shape and hue unceasingly, sent up into the warm grey evening air an unchanging unceasing murmur.*” (Italics mine.)に見られる、同じ言葉を、順序と組み合わせをずらしながら繰り返す

使用する技法も、「邂逅」の変態性老人の言葉に典型的に見られたように、呪縛されたような「麻痺」の雰囲気や巧みに醸し出す働きをしている。また、コーリーの身体の回転運動、女の身体やパラソルの、どこか自動機械の人形を思わせる回転運動も、それらと呼応している。

この物語の中で、レネハンはずんずん(leech) (第4段落)に、その出立ちは闘牛士(toreador) (第2段落)に喩えられている。コーリーがどことなく牛を思わせるとすると、次に出てくる虫(insect) (第10段落)の喩えは、牛などの動物に纏わり付く蝨などの羽虫を連想させ、いずれも小煩い、他の生き物の血で生きているような存在という事になる。事実、彼のただ酒にありつく様子(第4段落)はそのイメージに合致するし、現在の彼の最大の関心事も、如何にしてコーリーを動かして女から金をせしめ、そのおこぼれに与るかということである。しかし一方で、コーリーは(女との)冒険に乗り出し、レネハンが主人の世話を焼くという辺りは、騎士(knight)と従者(squire)のペアをも連想させる。コーリーの身体が腰のところからしか曲がらないという少し戯画的な描写も、鎧兜に身を固めた騎士の動きのparodyとも解釈できる。⁽²⁾ 表題の“Two Gallants”の“gallant”には、「伊達男」という意味の他に、現在では稀だが、かつては形容詞で“chivalrously brave, full of noble daring”の意味、また、“gallantry”に、“courtliness or devotion to the female sex, polite or courteous bearing or attention to ladies”(いずれもO.E.D.による定義)という騎士道に関連した意味があることは周知の通りである。

現代の墮落した騎士たちである「伊達男」の武器は、華やかな衣装と、女心をくすぐる言葉の才である。「ヨット帽を後にのけ反らせてかぶり」(第2段落)、「半ズボン、白いゴム靴、そして陽気に肩に吊されたレインコート」(第2段落)という若々しい出立ちに身を包み、「色々な物語、俗謡、謎々で武装した」(第4段落)レネハン、また長い独白でレネハンを笑わせ、「自分は誰それにこう言った、誰それは自分にこう言った、そして自分はこう言って話に決着をつけ」(第6段落)ることの出来るコーリーは、その意味では「伊達男」の有資格者である。

レネハンが素寒貧であることから、彼を下の階級の人間だと思えるのは間違いで、“*recherche*”(第3段落)というフランス語の使用、また明らかに労働者階級のためのバーに入った時の違和感(第19・20段落)(従って、waitressの“Three halfpence, sir.”という科白の“sir”にも、異なった階級の人間に対する皮肉が籠められているはずである)からして、彼は非労働者階級の出身者と見るべきであろう。またコーリーの父親は“*inspector*”であり、これも中産階級の家系ということになる。

しかし華やかであるべき「伊達男」たちのこの物語は、何となく冴えないくすんだ雰囲気や終始している。季節は、夏が終わり、秋を迎えようとしている頃であり、時刻は夕刻

から、人通りも疎らになる夜11時過ぎ頃まで、また天気も、次第に雲が濃く空を覆って月の光も射さなくなり、最後には雨模様になるという風に、全ての環境が、下降と凋落を匂わせている。若々しい出立ちにも拘らず、レネハンはこの11月で31歳を迎える。「腰の辺りは丸みを帯び、髪は薄く灰色がかってきて」(第2段落)おり、もう“adolescence”とは言えない、若々しくしようすればするほど侘しさの目立つ年代に差し掛かっている。コーリーも、かつては fashionable な South Circular 辺りの女性達を相手にしていたのだが、今では Baggot Street の“slavey”しか相手にできなくなっている。「二人の伊達男」は、盛りを過ぎつつある「伊達男」達の物語である。

レネハンは、笑ったり楽しそうに道化たりしているが、もうその笑いや道化には潑刺とした活力が失われており、彼がこうした「伊達男」の生活自体に深い疲労を感じていることが強調して描かれている。「目元や、口元や、鼻の脇から、顔中に広がっていき」表情の波紋、「痙攣的に震える体から、次々と小刻みに噴出」する「嘎れたような笑い声」、表情の波が顔から去った後に漂う「荒廃感」、たっぷり30秒続く音を立てない笑い(第2段落)、“That takes the biscuit!”と言った時の活力の抜けた声、それを糊塗するために付け足した“‘That takes the solitary, unique, and, if I may so call it, *recherché* biscuit!’”という陳腐な白けた“humour”、その後の真顔と沈黙(第2・3段落)、また女と一緒に電車に乗り込むコーリーを見送った後の、年老いて、それまでの陽気さが消え失せてしまった表情(第17段落)、それからスティーヴン・グリーン、グラフトン・ストリートをぶらつく時の「むっつりとした視線」、「彼を魅惑するように意図されているものの全てがどうでもいいもののように思われ」、暗い静かな路地に入ると陰鬱な光景が彼の気分にも適合したこと(第18段落)——こうしたこと全てが、レネハンの「伊達男」としての凋落を示唆している。

レネハンは、恐らくこれまでの人間との過度の付き合いで、冗談や機知の泉をすっかり枯渇させ、また、他人はいざとなると結局冷淡なものだという苦い経験を重ねてきたために、今では友人に対しても少しの情熱を持ち得なくなっている。彼は、自分自分で人を引きつけるような、コーリーにはまだ残存している魅力というものをほとんど全て喪失していると同時に、他の人間の中にも、交わるべき価値を見出し得なくなっている。第21段落の友人達との邂逅は、その付き合いがどんなに気抜けした無味乾燥のやりとりになってしまっているかを物語っている。話題は互いの知人のことに及ぶだけで、レネハン自身にも、友人達自身にも、交換するに値する興味ある内容が見出せないのである。

女性についてもレネハンと同じような幻滅に支配されている。彼に大胆になるよう挑発する視線はまだ彼に向けられているが、彼は億劫がってそれに応えようとしていない(第18段落)。では、コーリーの女に対するレネハンの、情熱とも呼べるようなはしゃぎっぷりや好奇心は何なのであろう？ 無論、獲物に対する関心であると名目は立つであろうが、

果たしてそれだけであろうか。レネハンは、自分が精力を消耗しなくて済む、友人の色事に自分を仮託することで、情熱の影のようなものを味わっているように見受けられる。コーリーの話したり行ったりする色事によって掻立てられる羨望と嫉妬の念が、現在のレネハンを生き生きとさせる唯一の隠された情熱もどきの興奮になっている。その証拠に、彼は、コーリーがしばしば振り返って見る通りすがりの女には何の興味も示さないのに、コーリーの、どこがよいのか分からないような女には、うって変わった強い好奇心を示している。そればかりではない。レネハンの視線は、女の衣服の細部、衣服が肉体を締めつけている様子、そして衣服の下に感じられる肉体、顔の造作、表情といったもののつぼを素早く漁り取っている。それは彼女がカモになるかどうかを査定している視線ではなく、そこからコーリーが得るであろう快楽を想像している視線である。

それは見すばらしいレストランでも繰り返される。窓には、食欲をそそる、青い皿に載せられたハムと、ふんわりと柔らかそうなプディングが陳列してある。それが女の肉体と衣装の隠喩になっていることは明らかであるが、レネハンはどこでもそれをじっと見るだけである、というか、いわば目に食べる行為を代替させているのである。それは無論、女性に対する“spirit”の欠乏と相同の、食物に対する“purse”の欠乏故の行為になっている。

レネハンの凋落の兆候は、他の面にも現れている。苟も「伊達男」を名乗りたければ、たとえ懐は寂しくても、細かなことに頓着しない男気と精神の豪奢なダンディズムだけは守り通さなければならない。レネハンが、見すばらしい、階級違いのバーに入り、テーブル・クロスの掛けてない席で、値段を聞いてから、豌豆まめ料理一皿を注文し、しかもそれを美味と感じ、心にメモするのは、「伊達男」の規範からすれば末期的行為である。彼がそのバーに入る時、右と左に視線を走らせたのは、さすがに、そんな所を知った者に見られれば面目丸潰れになると考えたからで、まだ彼の中に一片の矜持が残っていることを表している。また、コーリーは持っていないのにレネハンがレインコートやゴム靴を最初から用意していること、コーリーを追い掛ける決定的に重要な場面でも、雨がぼつりぼつり降り始めるとレインコートを羽織っていること(第26段落)、靴の底に柔らかな当て物を敷いていること(第17段落)、コーリーとの約束の場所に時間前に着くよう急ぎ足になっていること、待つ時間を潰すためにあらかじめ煙草を何本か残していること——これらの神経質なまでの用意周到さは、レネハンの、男気の弱った、委縮した心を映し出している。

しかし何よりも、「ぶらぶらするあてのない生活、綱渡りの生活、やり繰り算段と策略を巡らす生活」に飽き、ちゃんとした仕事、居心地のいい家庭を持ちたいというレネハンの心の中での述懐(第20段落)は、「伊達男」の信条に対する本質的な背信になっている。こじんまりとした堅気の生活こそ、「伊達男」の最も軽蔑して止まないものだからである。一方のコーリーはどうであろうか。女を待たせ、女に貢がせ、一見申し分ないように見え

る。一人の女に捕まるような野暮をせず、魅力的な女から女へ華麗に渡り歩く生活こそ羨むべき伊達男ぶりと言うのなら、未だ名も告げず、contraception は女に任せ、結婚の意図などさらさらしないコーリーこそ、「伊達男」の中の「伊達男」と言うべきであろう。レネハンは、前にコーリーがつきあっていた女が今は娼婦に身を落としているという話を聞くと、それはお前さんのせいだね、と言うが、これは咎めているわけではなく、賞賛の科白である。女を冷酷なまでに捨て、女はそれに絶望して苦界に身を落とす——そこにこそ「伊達男」の究極の名望があるからだ。従って、いやいや俺の前にも男はいたさ、というのはコーリーの謙遜であり、それを信じられない振りをするのも、“Base betrayer!”と言うのも、全てコーリーに対するオマージュになっている。しかしよく読んでみると、例えば、レネハンが自分のことでもないのに、女との待ち合わせの時刻に随分神経質になっているのに対し、コーリーは女が自分を待っていることに絶対的な自信を持っていて、女は少し待たせてやるといいんだなどと心憎い男っぷりを見せているのだが、実際に待っている女の姿を目にした時の、“There she is!”という咄嗟に口を突いて出た言葉の語気は、それまでの絶対的な自信とは多少調子がそぐわないのではなかろうか。そしてレネハンが、御拝顔といこうと持ちかけると、急によそよそしい態度になり、レネハンが（恐らく最初の意図とは違えて）紹介してもらうつもりなどないことを請け合うと、再び急に愛想よくなっているところも、何となく自信のなさやケチな根性を感じさせるのである。彼の歩道と道路の境界の鎖の跨ぎ方には、どことなく余裕を失したあせりが滲み出ていて読者の失笑を誘う。レネハンが（未練がましく）帽子を取って、頑張れよというサインを送った時のコーリーの返事の合図も、10秒後の、しかも帽子の位置をずらすというもので、よくよくレネハンが女に近づくことに用心深くなっている心事を窺わせるのである。

コーリーが女に近づいて行く時の、征服者然とした振舞い、挨拶もせずいきなり話しかける優越的態度、顔を近づけて何か艶っぽいことでも言ったのであろう、女を恥ずかしがらせ（つまり嬉しがらせ）しているところなど、「伊達男」の面目躍如たるものがあるが、前述の面を考慮に入れれば、全てレネハンの目を意識した演技ということになってくる。その証拠に、ずっとレネハンが後をつけているとは知らなかったであろうコーリーの頭は、丁度レネハンがコーリーの顔をひっきりなしに窺っていたように、女の方にひっきりなしに回転を繰り返しているではないか。また、帰って来た時の歩き方も、明らかに何か機嫌を損じて黙って足早に歩く女をコーリーが追い掛けるという図で、コーリーが男ぶりで彼女を全面的に参らせている訳ではないという内幕を覗かせている。スタンダールの『カストロの尼』の冒頭部に次のような一節がある。

十六世紀の佛蘭西に於ては、戰場又は決闘に於ける勇敢でなければ、男子の活動やその真の価値は発揚することも出来なかつたし、又賞讃を博することも出来なかつた。そうして婦人たちは勇敢を愛し、

且何よりも大胆を愛するが故に、彼女たちは男子の価値を決定する最上の審判官となったのであった。所謂“gallantry”の精神——婦人のために伊達を競い任侠を競うことはこれから始まったのであって、それが凡ての熱情を一つ一つ、恋愛までをも破滅に導いてしまったのである。つまりわれわれ人間の凡てを征服する彼の残酷な暴君——虚栄心が熱情を追いやってしまったのである。宜なるかな国王共は虚栄心を擁護する、そうして此処に勲章の力が生まれる⁽³⁾。

つまり現代の目からは理想化されている、騎士道に於ける“gallantry”からして、既に男同士の虚栄心によって、恋愛の本義を踏み外したものになっているという訳である。だとすれば、現代の一層墮落した“gallantry”が、男同士の虚栄のなれの果てであるとしても何の不思議もないであろう。コーリーは、レネハンの嫉妬を、自分の虚栄を肥らせる栄養となし、レネハンが虚栄心を踏み躪られることを以て倒錯的快樂の灯心とする、一種の共謀関係が成り立っているのではあるまいか。

しかしレネハンには、自虐を徹底させる「地下生活者」のような迫力は欠如している。彼は、自分自身の心理操作によって、深い傷を受けないように、やはり用意周到な精神の雨具を準備している。どんな卑屈な言葉も、揶揄の言葉として解釈できる余地を残しておくという方法（第8段落）もその一つである。（ただ相手はそんなことには頓着しないで、レネハンの贅辞だけを額面どおりに受け取るから、自分で自分を慰めるだけのことに過ぎない。）レネハンが、時間を見るために歩道から道路にひょいと飛び降りる場面（第10段落）があるが、これも、ここで自発的に飛び降りることによって、今まで実際にはコーリーの為に道路へ弾き出されていた卑屈な行為も、自然にしていたことのように見せ掛けるカモフラージュになっている。（勿論、コーリーはそんなことに気づく可能性はない。）そうして見ると、前述の“Base betrayer!”とコーリーに言った科白も、表向きの贅辞の裏で、少し揶揄にも解釈できると、自分では得心していたのかも知れない。

* * *

「二人の伊達男」の原稿を Grant Richards に送る際に、ジョイスは“the last story I have written—unless perhaps you have as superstitious an objection to the number thirteen as you seem to have with regard to Ireland and short stories in general”⁽⁴⁾と、この作品が、ユダの役割を果たすかもしれないこと——そしてそれは皮肉なことに印刷業者からの苦情が出ることによって部分的に実現するのだが——を冗談めかして言っているが、ジョイスがこの作品を執筆する時、それを意識していた可能性は少なくない。Florence L. Walzl が夙に、“the story . . . presents an ironic inversion of certain events in the life of Christ on Holy Thursday. The story is thus a study of betrayal, social, political, and religious.”⁽⁵⁾と述べているのは肯綮に中る指摘ではあるまいか。ジョイス自身が、『ダブリンの人々』の中で、「委員室のパネル記念日」を第一に、次いで「二人の伊達男」を

最も満足のいく作品として挙げている⁽⁶⁾のは、現代の読者には分かりにくい選択のように思われるのだが、逆に言えば、少なくとも当時のジョイスが、「裏切り」の主題をそれだけ重要視していたことを物語っている。

コーリーが、その“gallantry”によって、どの程度の残酷な精神的傷害を与えたかは断定できないものの、ある女性を実際に裏切ったこと、そして現在つきあっている女性も裏切ろうとしていること、また、その女性も、かつてつきあっていた牛乳配達の人に裏切られるか、裏切るかしたであろうこと、そして、葉巻をくすねたり、金銭をくすねたりすることによって、女中として働いている先の家の主人に対して裏切りを働いていることなどを考えれば、レネハンの“Base betrayer!”という言葉は、彼の意識しない epiphanic revelation を放つ機能を果たしている。特に、登場人物の若い女性は、濃い香水、けばけばしく安っぽい衣装、広がった小鼻、締まりのない口元などから、先例に照らして考えれば、コーリーに捨てられた後どのような転落の道筋を辿っていくのか、読者の脳裏にはまざまざと浮かんでくるようだ。

その点では、レネハンも例外ではない。“Ditto here!”具体的な事例には何一つ言及されていないが、その常に相手の顔色を窺っているような、追従的な卑屈な態度、人間関係に対する深い疲労の色などから考えて、その半生は、多くの裏切りに充ちたものであったことであろう。そして一方的に被害者であったのみならず、自分も多くの裏切りを行ってきたであろうことは、安っぽいバーへ入る時のこそそとした姿、自分の卑屈さを自分で誤魔化している姑息な心理、更には、現在の蛭のような生活を見れば、容易に想像がつく。そして今、裏切りを前提とする「伊達男」の生活自体を、コーリーを含めた仲間全体を、無価値なものとして捨てたいと思っていることによって、ある意味で二重の裏切りを犯そうとしているのである。

物語の前半部でレネハンが腐心しているのは、女から金を巻き上げることを如何にしてコーリーに確言させるかということである。第2段落に出てくる“a long monologue”の内容は書かれていないが、それに続くレネハンの応答の、“And where did you pick her up, Corley?”から、物語に登場する女性の話をしていたことが分かり、そして“Well!... That takes the biscuit!”という応答は、その後第5段落で繰り返された時に、レネハンが、コーリーが如何に巧みに、自分の素性を隠しつつも女の好意を勝取ったかということに対する感心を表明する科白になっているところを見ると、最初の独白に対しても同様の趣旨を籠めていたであろうから、コーリーの独白はそうした手口を披歴したものであったと考えるのが妥当であろう。レネハンの目が、「小狡そうな喜びに輝」いていたというのもそれを裏付けている。そして、以下に続くやりとりでは、レネハンが、コーリーをひたすら持ち上げ、上機嫌にさせることを心掛けていた。そして、“Of all the good ones ever I

heard, that emphatically takes the biscuit!” という、恐らく彼の褒め殺しの決まり文句と思しきものを再度放ち、コーリーの歩き振りがそれに反応したのを見ると、第6段落ですっと煙草を差し出している。後で判明するように、煙草はレネハンにとっては貴重なものであるから、これは思いきった出資と言えよう。そしてややあってから、“Well... tell me, Corley, I suppose you'll be able to pull it off all right, eh?” と持ち出している。読者は、最初に読んだ時には、この科白が、女に金を出させることを意味しているとはまだはっきりとは分かっていないが、再読してみると、その言い方が、少し間を置き躊躇していることからして、これまでの全ての会話は、これを絶好の時期に言い出すための準備工作であったことを知るのである。コーリーが通り過ぎる女たちに微笑みかける（気分のよい証拠だ）のに対し、レネハンは月の面をよぎる雲を見つめていたのも、“At last he said...” という呼吸も、レネハンが虎視眈々と機会を狙い澄ましていたという消息を表している。もし、最初のコーリーの独白の中に、金を巻き上げる話題が既に含まれているとしたら、こうしたあらたまった聞き方はしないはずである。女との待ち合わせの場所が近づいてきたので、決して伶俐とは言えないコーリーが忘れるのを恐れて、何とか確認を取っておきたいという気持ちだっただろう。

しかし、用心深いレネハンは、もう一回り追従の術策の限りを尽くしてコーリーの伊達男ぶりを持って嘯し、第9段落でもう一度、“But tell me, are you sure you can bring it off all right?” と念を押している。すると今度は、あまりのしつこさにコーリーもやや気色ばんで、“I'll pull it off. Leave it to me, can't you?” と言って、眉根を寄せる。実はこの言葉こそ、レネハンが求めていたものである。最初に質した時には、コーリーは片目をつぶってみせるという、少し真剣味に欠ける応答をしたため、レネハンの意に沿わなかったのである。腹は立てさせてしまったが、この企てに対する真剣な返答を得たことに満足して、レネハンはそれ以上深追いはしない。するとすぐにコーリーの眉根は緩み、別の考えに浸るようになっていく。もし、この計画の首謀者がコーリーであったとすると、コーリーにとって分かりきった重要な目的をレネハンが2度も確認するのは不自然であるし、また、コーリーがすぐに別の想いに耽るというのも頷けない。様々な状況証拠から考えて、この計画はレネハンが機を捉えてコーリーに吹き込み、それに同意させたのであると結論してまず間違いはないだろう。そうすると、この二人の伊達男の関係は、一つの隠れた層では、レネハンが黒幕で、コーリーが彼に踊らされて手を汚す役回りを演じていることになる。レネハンの“leech”の異名は決して誇張ではない。彼がいつの間にか回し飲みの中に入っているという神業のような技量は、うっかりすると読者までも誑かしてしまいかねない話術の妙に遺憾なく発揮されているのである。

更にレネハンには、少し怖いような偏執狂的な所もある。彼がコーリーと女を気づかれ

ずに尾行し、ドニーブルック行きの電車に乗り込むまで確認しているのは、一つのレベルで見れば、他に従属した生の、幾分自虐的な卑屈な行為であったが、この隠されたレベルでは、狙った獲物に一度食いついたら放さない執念深さとして読むことができる。コーリーが来ないのに業を煮やしたような、“They must have gone home by another way. The paper of his cigarette broke and he flung it with a curse.”（第23段落）という所作や、追いついたコーリーが自分の問いに答えない時の、“He was baffled and a note of menace pierced through his voice.”（第27段落）といった刺々しさには、そうした隠された一面が覗いているような気もする。但し、レネハンを、表向きは卑屈に振舞い、陰で狡猾な画策をする冷徹な人間とばかり見るのは、明らかに誤っている。何と云っても、彼自身が人生に裏切られた人間であるというのが主調でなければなるまい。そこに、こうした面も、弱者の生き延びる一つの奸智として並存しているのであろう。

* * * *

Walzl の言う “social betrayal” については、以上見てきたようなことが考えられるが、“political betrayal” に関しては、Thomas Moore の “Silent, O Moyle” を弾く “harpist” という設定が、核心的役割を担っている。

Silent, O Moyle! be the roar of thy water,
Break not, ye breezes, your chain of repose,
While, murmuring mournfully, Lir's lonely daughter
Tells to the night-star her tale of woes.
When shall the swan, her death-note singing,
Sleep with wings in darkness furled?
When will heaven, its sweet bell ringing,
Call my spirit from this stormy world?

モイルの海よ、波の轟きを鎮めてはくれぬか
汝海風よ、風の鎖を絶たずにはくれぬか
Lir の寂しき娘、哀しき泣きもて
月に向かいて、今その哀話を語る間。
——何時この白鳥の身は、末期の歌を歌いつつ
翼を闇に畳んで眠ることができるのか
何時天は、その甘美なる鐘を鳴らして、
我が魂をこの艱難の世から呼び寄せてくれるのか

Sadly, O Moyle, to thy winter-wave weeping,
Fate bids me languish long ages away;
Yet still in her darkness doth Erin lie sleeping;
Still doth the pure light its dawning delay.
When will that day-star, mildly springing,
Warm our isle with peace and love?
When will heaven, its sweet bell ringing,
Call my spirit to the fields above.

モイルの海よ、汝の冬の波音に合わせ哀しく咽びつつ
幾世紀をも彷徨い過ごさねばならぬ我が定め
我が愛しき Erin の国土は未だ闇に眠り
清き光は未だこの闇に射さず。
何時暁を告げる太陽は、柔らかに弾みいで、
愛と平安もて、我が国土を照らさんとするのか
何時天は、その甘美なる鐘を鳴らして、
我が魂を天の平野に呼び寄せてくれるのか

Lir は最初の妻が死ぬとその妹を妻としたが、彼女は先妻の 4 人の子を白鳥の姿に変えてしまった。こうして娘の Fionnuala はキリスト教が伝来するまで、白鳥の姿で何百年に

も互ってアイルランドの湖上を彷徨わねばならない運命となったというのが、この歌の背景であるが、無論キリスト教の伝来とは、ここではイギリスからの独立を意味している。そして“harp”はアイルランドの栄光を象徴する楽器である。それなのに、「二人の伊達男」の harpist は、疲れ果てて情熱を失った男として、harp は、男に弄ばれることに慣れたすれっからしの自堕落女として描かれている——“He plucked at the wires heedlessly, glancing quickly from time to time at the face of each new-comer and from time to time, wearily also, at the sky. His harp too, heedless that her coverings had fallen about her knees, seemed weary alike of the eyes of strangers and of her master’s hands.”（第11段落）そして、これが Kildare Street Club という、親英国的な上流の伊達男たちの集うクラブ⁽⁷⁾の前で演奏されていることが、皮肉に一層の輪をかけている。アイルランド国民は、自分自身を裏切ることによって、独立を嬴得ず、魂を萎えさせ、精神を淀ませているのではないか。

しかしこの情けない奏者によって弾かれてはいても、音楽は独立した生命体のように、深く豊かに響き、コーリーとレネハンは沈黙を強いられる。心の琴線が共鳴したからである。コーリーが去った後独りになったレネハンは、暫く心の中で旋律を奏でてみる。ハーブ奏者は「伊達男」のなれの果てを顕現しているのかもしれない。

イギリス支配の影は随所に読み取れる。頻出する通りの名前の多くがイギリス人から取られたものであることは言うまでもない。それはどの植民地にも見られる陰鬱な光景である。威勢のいいコーリーの威勢は、彼の父親が“inspector”であるところから来ている。そしてその父親の権威は、彼が務める、イギリスの統治を守るための組織 Garrison から来ている。コーリーの歩き方は、父親を真似たものであるというが、なるほど、コーリーの出立ちやその歩き方は、イギリスの“bobby”を連想させる。レネハンが生計を依存していると噂される競馬の世界も、当然イギリス資本の、愚劣な民衆を搾取するギャンブル産業である。コーリーの女も、勤める先は、極上物の葉巻を吸っていることからして、イギリス人ないし、親英的な富豪であろう。（親英的になる以外に、どうして極上物の葉巻を吸えるような生活が得られよう。）また彼女の肉体は、青、赤、白の Union Jack を想わせる出立ちにくるまれている。三人とも、イギリスの威を借り、イギリスに寄生し、イギリスに仕えることによって、その生を送る糧を得ている。レネハンをじろじろと見つめた労働者階級の人間の視線には、故国を裏切ることによって甘い汁を吸っている人間に対する反感も籠められていたに違いない。

* * * * *

注意深く読むと、レネハン、コーリーと別れて独りになってから、第23段落の “His

mind became active again.”の箇所に至るまで、彼の最大の関心事たる金のことを忘れていたことが分かる。そのきっかけを作ったのが、“Silent, O Moyle”の音楽であった。店を出ると、再び惰性でのように、神経的なゲームが継続される。小鼻が拡がり前歯の突き出た、競馬馬を想わせる容貌の女を、コーリーはうまく御すことができただろうか、とレネハンは予想に気を揉み始める。突然、コーリーは自分を裏切ったのではないかという疑惑が彼を襲う。そしてその疑惑が確信に変わった時、再びその確信にも裏切られ、コーリーたちの姿が現れる。レネハンは喜びに小躍りし尾行を始める。やっと彼の生に息吹が通い始める。彼は二人の歩き方から、否定的な予測を立てる。しかしレネハンが失敗しそうなことが、何故か半分は嬉しそうな風情である。

Baggot Street の家の前で、どのようなドラマが展開されたのか、レネハンも読者も固唾を呑んで見守るが、確かなことは分からない。女は、地下勝手口へ降りて家に入り、数分後、正面玄関から出てきた。コーリーは正面玄関の階段の近くで待っていたのだから、女がそこからもう一度出てくることを前提としていたようだ。“Then the hall-door was opened slowly and cautiously. A woman came running down the front steps and coughed.”(第25段落)の叙述に見られる、ドアをゆっくりと用心深く開けているところ、階段を駆け降りているところ、咳払いをしているところ等、いずれも、主人の家の者に気づかれないようにするための配慮と解釈できる。しかし肝腎の場面は、コーリーの大きな体が女の体を隠してしまい、確認できない。果たして金銭の授受が行なわれたのであろうか。

それから先のコーリーの様子も、レネハンと読者を“baffle”する。彼は、スティーブン・グリーンへ向かって足早に歩き、レネハンが二度呼びかけても返事をせず、“His features were composed in stern calm.”という取り付く島もない様子。そして、ついにレネハンが“menace”を声に出すと、“Corley halted at the first lamp and stared grimly before him. Then with a grave gesture he extended a hand towards the light and, smiling, opened it slowly to the gaze of his disciple. A small gold coin shone in the palm.”という種明かしに至るのである。読者は、この結末に来て初めて、今まで二人の「伊達男」の間で取り交わされていた企てが、女から金を巻き上げることだったとはっきりと分かる(それまでは暈した描写で臆にしか分からない)ので、この人工の光に光る金貨によって、コーリーが女を騙したであろうこと、女が主人の家の金をくすねたであろうことを悟るのである。金貨は、無論イギリスの金貨(sovereignかhalf sovereignだと考えられている)で、皮肉が利いているが、half sovereignであったとすれば、そこに“gallantry”でその勇名を馳せたEdward VIIの肖像が刻んであったはずで⁽⁸⁾、皮肉が一段と増すことになる。この、ユダが銀30枚で主を売り渡したことを連想させる結末は、“Hard baked bread with-

out leaven”であるビスケットへの何度かの言及、晚餐、ゲッセマネの夜を想わせる暗夜、ユダの接吻を想わせるコーリーと女との姿勢などと共に、どこか Holy Thursday と通ずるものを感じさせる。

コーリーのそっけない応接や延引や勿体は、最後の効果を高めるための演出であったのだろうか。スティーブン・グリーンへ向かって足早に歩いていったのは、ひょっとしたら、レネハンをも裏切ろうとしていたのではないだろうか。しかし、読者が一番同情を寄せるのは、コーリーの女に対してである。この女性は、前に牛乳配達の人と付き合っていたといい、contraceptionの方法にも長けているのだから、清純とは義理にも言えないし、ダブリンで住み込みの“slavey”をしているのだから、多分田舎者で、教育も財産もあるまいし、その服装の趣味の悪さは特筆ものだし、顔も美しくないのみならず、品格もないし、だらしなく好色ですらありそうだ。物をくすねるくらいだから、徳義心もないに決まっている。しかし——

At the corner of Hume Street a young woman was standing. She wore a blue dress and a white sailor hat. She stood on the curbstone, swinging a sunshade in one hand. . . . [Corley] approached the young woman and, without saluting, began at once to converse with her. She swung her sunshade more quickly and executed half turns on her heels. Once or twice when he spoke to her at close quarters she laughed and bent her head. (第13・14段落)

ここに描写されている彼女の姿には、再読してみると、コーリーに対する偽りのない純情が全身で表現されていて、この男たちのさもしさに充ちた物語の中に置くと、何か非常に心に残るものを感じられるのである——ここには、卑しい“slavey”とともに、コーリーが“*She's a fine decent tart.*” (第10段落) と賞翫する「女性」が存在している。正面玄関から出てきた彼女を、ジョイスは“*a woman*”と呼んでいる。しかし結局コーリーは、レネハンの煽る、女を弄び心を許さないという、墮落した“*gallantry*”の理想に屈してしまったかのように見える。Charles Lambがその“*Modern Gallantry*”の中で美しく描いているような、「女性」に対する敬意を失わないことをもって、真の“*gallantry*”とするならば、墮落した意味での“*gallantry*”の成功を意味する金貨——騎士道の隠喩で言えば「聖杯」に相当しようか——は、コーリーとレネハンが、性欲と金銭欲と虚栄という最も根源的な人間の欲望——それは、この物語の冒頭の、絶えず形と色を変える、人間の群衆の奇怪な姿が体現している——の働きによって、「女性」という聖霊を冒瀆したその象徴ということになるであろう。少なくとも読者は、金貨を見て、ここに一つの「罪」が犯されたというはっきりとした印象を持つのである。それが恐らく、最も真正な意味での“*religious*

betrayal” になっているのだと思われる。コーリーの内部に、どことはなしに感得される、「女性」に対する純情が隠されているとしたら、彼はしみつたれた欲望の為に、心ならずも自分自身を裏切ったことにもなるのである。

* * * * * *

しかし、最後の金貨のイメージは、もう一つの別のイメージ——月——と重なっている。月が次第に雲に覆われ、やがて雨となっていく大きな構図の働きで、金貨は、読者が無意識に心の中に抱懐する暗夜の中で、はっとするような、月の光が輝き渡るような効果を齎すのである。

レネハンが、“Lenehan’s gaze fixed on the large faint moon circled with a double halo. He watched earnestly the passing of the grey web of twilight across its face.”

(第7段落) と月を見つめる時、彼は、前に指摘したように、いつコーリーに企ての確認をさせるかを見定めようとしている。月の面をよぎる雲は、彼の想念を映しているかもしれない。コーリーが、“He moistened his upper lip by running his tongue along it. The recollection brightened his eyes. He too gazed at the pale disc of the moon, now nearly veiled, and seemed to meditate.” (第9段落) と月を見つめる時、彼は過去につきあって今は零落した女との過去を思い出している。過去の女は、月のように、もうほんの朧にしか思い出せないかもしれない。“harpist” が、“He plucked at the wires heedlessly, glancing quickly from time to time at the face of each new-comer and from time to time, wearily also, at the sky.” (第11段落) と、物憂げに夜空を見上げる時、月はまだすっかり隠れてしまっている。しかし、彼は、レネハンやコーリーが月を見ていた時刻には、やはり物憂げに月を見ていたはずである。彼は見物人が新たに加わるたびに、ちらりと素早くその顔を見ているが、それは、金を出しそうな奴かどうかの見定め視線であろうから、月を見つめる視線も、雨になりそうな空模様に、商売あがったりの嘆息を交えていたかもしれない。三者三様の即物的な想いが月に向けられていたのであろう。

しかしながら、魂の最も深いところで、丁度、だれた“harpist”の奏でる音楽が、レネハンとコーリーの魂に沁み入ったように、彼らは月の光の独立した感化を受けていたかもしれない。その月の光は、遙か遠くから、Lirの娘 Fionnuala が物語る哀しい声を運んできたことであろう。そしてそうであったとすれば、月を想わせるコーリーの掌中の金貨は、欲望と罪の金色の光沢の奥に、哀しみの清澄な光を少しばかり宿していなかったであろうか——丁度、冒頭部のグロテスクな群衆が、“illuminated pearls”のような街灯の光に向かって立ち昇らせていた眩きが、どことはなしに、呪縛された Fionnuala の眩きの、ひいては人間本然の、哀しみの調子を帯びているように。

— 註 —

- (1) テキストには、*Dubliners* (Viking Press, 1961) を用いた。尚、段落の分け方には、幾つか違ったやり方が考えられるが、本論では便宜上、28段落を設定した。
- (2) Robert Boyle, “‘Two Gallants’ and ‘Ivy Day in the Committee Room,’” in *James Joyce Quarterly*, Volume 1, Number 1, Fall, 1963, p.4参照。
- (3) 谷崎潤一郎訳。用字等一部改変。
- (4) Stuart Gilbert (ed.), *Letters of James Joyce* (Viking Press, 1957), p.60. 周知のように、『ダブリンの人々』は、最初12編で構想されていて、それに新たに、“Two Gallants,” “A Little Cloud,” “The Dead” の3編が加えられた。
- (5) Florence L. Walzl, “Symbolism in Joyce’s ‘Two Gallants,’” in *James Joyce Quarterly*, Volume 2, Number 2, Winter, 1965, p.73.
- (6) Richard Ellmann, *James Joyce*, New and Revised Edition (Oxford University Press, 1982), p.231参照。
- (7) Warren Beck, *Joyce’s Dubliners: Substance, Vision, and Art* (Duke University Press, 1969), p.140に、Kildare Street Clubが、“the preserve of Anglo-Irish gentry and the Crown’s representatives, and predominantly Protestant . . . the abode of swells, who played for high stakes in elegant card rooms from which ladies were without exception excluded, though later they were admitted to other parts of the club, but only by a special entrance” であったという、Mrs. Nora Duff, the general proprietress of Buswell’s Hotel, Molesworth Street Dublin からの説明がある。
- (8) Donald T. Torchiana, “Joyce’s ‘Two Gallants’: A Walk through the Ascendancy,” in *James Joyce Quarterly*, Volume 6, Number 2, Winter, 1968, p.126参照。